

連続シンポジウム「分離派建築会誕生100年を考える」第4回

The 4th symposium on the centennial of the birth of Bunriha Kenchiku Kai

# 分離派建築会と建築における「田園的なもの」

On the significance of "the pastoral" in the architectural works by the Bunriha members.

日時 2018年6月16日(土) 13:30—17:30

会場 京都大学楽友会館2階会議・講演室 (京都市左京区吉田二本松町)

定員 100名 (参加費無料/先着順)

進行

本橋 仁 (京都国立近代美術館) *Jin Motobashi*

開会

市川秀和 (福井工業大学) *Hidekazu Ichikawa*

## 第1部 各論発表

杉山真魚 (岐阜大学) *Mao Sugiyama*

「田園」をめぐる思想の見取り図

菊地 潤 (オガワホーム) *Jun Kikuchi*

瀧澤真弓設計「日本農民美術研究所」

鞍田 崇 (明治大学) *Takashi Kurata*

ノイズとしての「田園」——民藝運動とその時代

田路貴浩 (京都大学) *Takahiro Taji*

堀口捨己のまなざしと心性

閉会

加藤耕一 (東京大学) *Koichi Kato*

## 第2部 ディスカッション

『都市と田園、あるいは田園都市』

パネリスト

杉山真魚・菊地 潤・鞍田 崇・田路貴浩

モデレーター

岡山理香 (東京都市大学) *Rika Okayama*

分離派建築会が発足された当時、社会にはデモクラシーの潮流が現れたり、ロシア革命に後押しされて社会主義思想が隆盛をみたりするなど、「大衆」や「民衆」に即した種々の主義や主張が生まれた。社会や精神の「改造」が叫ばれ、人々の眼差しは新しい都会・都市と伝統的な田舎・地方の両者に向けられた。本シンポジウムでは、分離派建築会のメンバーが新しい創作を標榜しつつも、堀口捨己の「紫烟荘」、瀧澤真弓の「日本農民美術研究所」、蔵田周忠の一連の田園住宅など、民家(農家)に着想を得たと考えられる作品を残していることに注目する。「田園的なもの」「地方的なもの」がかれらの建築制作のモチーフに数えられたのは、刻々と変化する日常生活に対するひとつの応答であり、そこには表層的な模倣を超えた意味があったと考えられる。近代建築の多様化と均質化の中でかれらが摂取した地方性の問題について、分離派建築会の活動と同時期に創始された民藝(=民衆的工藝)運動も視野に入れながら検討したい。

主催 分離派100年研究会

問合先 京都大学田路研究室 (tajilab.kyoto@gmail.com)

紫烟荘(堀口捨己、「紫烟荘画集」1927年)

聖シオン会堂(蔵田周忠、「建築画報」1926年)

日本農民美術研究所(瀧澤真弓、竣工時のパナキ、1923年頃)